

ニッポン ドクター和の 臨終図巻



コロナ禍でなかなか行けなくなりでしたが、僕はゴルフが好きです。医者として「歩く」ことを提唱していますが、18ホールを回るとおよそ10^分歩く計算になります。1ラウンドを気持ちよく歩けるうちは、「まだ俺は大丈夫だろう」と妙な自信がきます。そして、この人のゴルフに関する本を愛読していたので、大変寂しいです。

芥川賞作家で、最後の無頼派とも言われていた作家の高橋三千綱さんが8月17日に東京都八王子市の自宅で死去されました。享年73。死因は、食道がんと肝硬変との発表です。死因が2つ？ と不思議に思う人もいるかもしれませんが、しかし、高

220 作家 高橋三千綱

この時、主治医から肝硬変で余命4カ月と宣告され、「これ以上酒を呑むのであれば、治療は何もない」と匙を投げられました。しかし、医者からそう言われた帰り道も呑んだぞうです。もはや自分では止められない依存症の状態だったのです。

医者に止められても酒を愛し続け

高橋さんの病歴を知ると、実は2つどころではなかったはずで、死亡診断書を書いた主治医も頭を悩ませたことでしょう。

高橋さんは、『ありがとう糖尿病、よろしく肝硬変』という、なんともけったいな自伝的小説を2016年に出版しています。

もうめっちゃくちや、医者泣かせ！読んでそんな感想を持ちましたが、なぜか憎めないのです。

高橋さんはまず、34歳のときに胃

潰瘍と十二指腸潰瘍と診断され、胃の4分の3と十二指腸球部の切除手術を受けています。手術後、肝臓に異変が起きてそのまま2カ月の入院。

長尾和宏（ながお・かずひろ）医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。この連載が『平成臨終図巻』として単行本化され、好評発売中。関西国際大学客員教授。

その後も酒を愛し続け、糖尿病と診断されながらも毎晩1日6合ほどの晩酌を続けていたそうです。61歳のときに倦怠（けんたい）感を覚えて血液検査を受けると、γ-GTPの数値が4000台。基準値は男性で80以下です。僕はそんな数値の人を診たことがない…。

たのでしよう。

それから3年後、64歳のときに食道がんと診断され、手術。その後、アルコール性肝硬変の合併症である脳性肝炎を発症。さらに1年後の2016年には胃がんが発覚しますが、この時は手術を拒否。その後、民間療法を受けるも、「効かなかった」と述べています。

こんな状態でそれから5年も生きられた高橋さんの生命力の強さに、ただ驚くばかりです。



先の小説は、主人公がリビングウィルを書くシーンで終わっています。「痛み止めを打つてもまた俺に意識があるようだったら、そっと一本燗酒をつけてくれ」と。果たして、高橋さんのリビングウィルは叶えられたのでしょうか。8月ですから、冷酒だったかもしれませんね。